



## 私的京都議定書始末記（その22）

－AWG-KP とはどんな場か（2）－

2013/11/13

英国で考えるエネルギー環境問題

有馬 純

日本貿易振興機構ロンドン事務所長、経産省地球環境問題特別調査員

160ヶ国近くが参加する国連温暖化交渉であるが、キープレイヤーはおのずと限られてくる。12回にわたって参加したAWG-KPにおいても、毎回必ず発言する「会議の顔」のような人々がいる。今回はAWG-KPの主要な登場人物の何人かを紹介しよう。

### 途上国の交渉官達

AWG-KPはその性格上、途上国が先進国に対して厳しい削減目標を迫る場であり、途上国の交渉官にとっては腕の見せ所である。

南アのアルフ・ウィリス交渉官は白髪頭をポニーテールにした巨漢であり、AWG-KPにおける途上国交渉官のスタープレイヤーの一人であり、理路整然とした議論の進め方は「敵ながらあっぱれ」であり、先進国交渉官からも一目おかれる存在である。落ち着いた口調で先進国の歴史的責任を説き起こし、先進国の削減目標については「そのうち国内削減分はどれだけか？」と釘を刺すのを忘れない。EUのルンゲメツカー交渉官と同様、スモーカーであり、休憩時間に三人がよく一緒になった。



アルフ・ウィリス交渉官（南ア）



ゴッシュ博士（インド）

インドのプロディプト・ゴッシュ博士は、先進国の歴史的責任、先進国と途上国の公平性 (equity) の問題を、謹厳な口調で主張する。AWG-KPのワークショップの際、「先進国のこれまでの歴史的責任を考えれば2020年時点で90年比70%以上削減してもらわねばならない」とプレゼンし、思わずメモを取る手が止まったことを良

く覚えている。彼を含め、概してインドの交渉官は難しい言い回しを使うことが多く、加えてインド訛りの英語のイントネーションは聞き取りづらい。にこりともせず、近寄り難い雰囲気を感じるが、2009年6月にAWG-KPで「麻生目標」をプレゼンした後、彼にアプローチし、「日本は真面目に削減ポテンシャルを積み上げて目標を作った」と述べたところ、謹厳な顔で「日本が真面目なことはよくわかっている」と言ってくれた。

ブラジルのミゲス交渉官は、私が2000年代初めに京都議定書の細目を交渉していた頃、既に主要プレーヤーであったベテランだ。CDM理事会のメンバーとして京都メカニズムにも通暁している。「AWG-KPでまず先進国全体の削減幅を決めるべきだ」というのが彼の持論であり、「米国のいないAWG-KPで米国を含む附属書I国全体の削減幅をどう決めるのか」という私とよく論争になった。そのやり取りは次回に譲る。



ホセ・ミゲス交渉官（ブラジル）



MJ・メイス交渉官（ミクロネシア）

ミクロネシアのMJ・メイス交渉官は、「お雇い外国人交渉官」である。島嶼国連合（AOSIS）のスポークスパーソン的な立場で、元来が弁護士なので非常に弁が立ち、しかも早口なのでノンネイティブ泣かせでもある。毎回、先進国が表明した削減目標の一覧表を席上配布し、その合計が「科学が要求する削減幅」に比べて、いかに不十分かを立て板に水の調子で論ずる。私が首席交渉官の頃はミクロネシア代表だったが、その後、サンタルシア代表に転籍した。今はどこの国の交渉団をしているだろうか・・・

中国交渉団もAWG-KPでの発言が多い。向かって左側、日本代表団の間で「イガグリ頭」のニックネームで通っていたチャン・グオチャン 交渉官はポズナンのCOP14の際は着任したてで、今ひとつ自信なさげであったが、その後、精進よろしきを得て(?)立派な先進国バツチャーに成長した。私がAWG-KPで京都第2約束期間に批判的なポジションをとる度に、それを受けて日本を名指しで批判することもしばしばであった。

アフリカグループを代表してしばしば発言していたのはガンビアのオスマン・ジャル交渉官である。島嶼国と並んで地球温暖化の被害を最も受けている地域であるとの観点から、アフリカ諸国の舌鋒も鋭かった。しかし、会合の外で彼とコンタクトすると相好を崩して「自分はJICAの研修プログラムで日本に滞在したことがある。日本の環境技術、環境管理のレベルはすばらしい」と握手を求めてきた。積善は大事だと改めて思った次第である。



チャン・グオチャン 交渉官 (左) (中国)



オスマン・ジャル交渉官 (ガンビア)

産油国を代表してしばしば発言していたのがサウジアラビアのタウラ交渉官である。AWG-KPにおける産油国のポジションは微妙だ。巨額のオイルマネーを手にする富裕な国である一方、途上国グループに属し、先進国に対峙する立場にある。他方、先進国で温暖化対策が進めば、石油ガス需要が低下することになる。それが温暖化対策の進展に伴う遺失利益を保証せよという主張につながってくる。タウラ交渉官はサウジ原油の上得意である日本に親しみを持っているらしく、「自分たちは他の途上国と違って先進国に〇%削減しろとは言わないんだ」と話しかけてくることもあった。



アブドラ・ハリド・タウラ交渉官 (サウジ)



ネレ・マリエン交渉官 (ボリビア)

途上国の中で一際、異彩を放つのが反米中南米諸国のグループ、ALBAである。AWG-KPでスポークスパーソンの立場にいたのがベネズエラのマリエン交渉官であり、「母なる地球 (mother earth)」というキーワードを駆使しながら、先進国に高い削減義務と巨額な途上国支援を求める。途上国の中でも最左翼と言っても良いだろう。ALBAはCOP15においてコペンハーゲン合意を「採択」ではなく、「留意」に追い込み、一躍有名になる。

## 先進国の交渉官達

対する先進国の交渉官達を見てみよう。

欧州委員会のアルトゥール・ルンゲメツガー交渉官は、EUの顔的な存在である。彼については以前の投稿で紹介したが、AWG-KPのスタープレイヤーであり、頭の回転も速く、弁もたつ。京都交渉の頃から、EUとは意見が対立することも多いのだが、AWG-KPで共闘路線をとることもあった。例えば「先進国の削減目標については、米国の参加していないAWG-KPと米国の参加しているAWG-LCAとの連携をとらなければ意味がない。AWG-KP

で数字の議論を先行させることには反対」という点では両者の意見は一致していた。面白い表現を使うのも彼の特色で、ある時、EU とのバイ会談の際に、彼が「pig in a poke」という表現をしばしば使った。我が方のノートテーカーはこれが聞き取れず、「kick in the ball」（股間を蹴り上げる）という驚天動地の聞き間違いをしたのだが、彼に後で確かめて見ると「中世に豚肉（pig）と称して袋（poke）に入れて犬や猫の肉を売ることが横行した。そこから派生して、中身を良く確かめずに買ったら、自分の意図するものとは全く違っていただけを指す」のだそうだ。これだから英語は奥が深い。スモーカーで会議の合間に南アのウィリス交渉官と共によく一緒になった。ある時、タバコをねだってきたので、「1本あげるごとに日本の削減目標は5%ずつ少なくするからね」と言ったら苦笑いしていた。



アルトウール・ルンゲメツガー交渉官（EC）



ホセ・ロメロ交渉官（スイス）

スイスのホセ・ロメロ交渉官は私が初めて温暖化交渉に関与した頃、政策措置交渉グループの議長を務めていたベテランである。議論がぎすぎすしてきた時に、彼が発言すると、そのふんわりとした人柄のせいか、雰囲気や和らぐという不思議な人徳のある人である。

日本が参加するアンブレラグループでは議長国豪州のロバート・オーウェン・ジョーンズ交渉官とニュージーランドのステファニー・リー交渉官の存在感が大きい。優男風で低音の美声の持ち主であるオーウェン・ジョーンズ交渉官は巧みな交渉官でもあった。「AWG-KP の議論を重視している」と言いつつ、先進国の数字の議論をするためには、まずメカニズムや温室効果ガスの範囲等の技術的な側面を固めなければ駄目であるとの主張を展開し、先進国の数字の議論だけが AWG-KP で先行することを防いでいた。リー交渉官も弁が立ち、メカニズムの範囲や LULUCF の計算方法が固まらなければニュージーランドの目標設定はできないと説得力のある議論を展開していた。



ロバート・オーウェン・ジョーンズ交渉官（豪）



ステファニー・リー交渉官（ニュージーランド）

EU、豪州、ニュージーランドはいずれも AWG-KP で米国を除く先進国の数値目標の議論のみが先行することに反対であり、日本と立場を共有していたが、京都第 2 約束期間への参加については必ずしも否定的ではなく、この点では米国が決して参加することのない京都第 2 約束期間への参加に否定的な日本とはニュアンスが異なっていた。その意味で日本とほぼ同じ立場をとっていたのがカナダとロシアである。カナダのジョン・モフェット交渉官、ロシアのオレーグ・シャマノフ交渉官とは会議の外でもよく連絡を取り合っていた。ジョン・モフェット交渉官は途上国の挑発的なコメントにも常に沈着冷静さを失わず、信頼できるパートナーであった。ただカナダは京都議定書第 1 約束期間の目標未達成がほぼ確実視されている中で、京都第 2 約束期間に否定的な立場を前面に立って主張することを回避する傾向があった。オレーグ・シャマノフ交渉官とは COP7 で初めて会ったが、マラケシュ交渉の後、ニューヨークの国連代表部に勤務し、再び気候変動交渉に参加した「出戻り組」であった。非常に弁の立つ人であり、国連交渉のダイナミクスも熟知した強力なプレーヤーである。安全保障理事会常任理事国として周囲の圧力にめげずに「二エット」と言う経験を積んでいるせいか、腹もすわっている。その意味で非常に頼りになるパートナーなのだが、人数の少ないロシア交渉団の事実上のヘッドとして、あちらの交渉グループ、こちらの交渉グループを飛び回っており、AWG-KP には彼の部下が参加していることが多かった。したがって京都第 2 約束期間に関する議論については日本が前面に立つことがどうしても多くなった。



オレーグ・シャマノフ交渉官（ロシア）



ジョン・モフェット交渉官（カナダ）

以上、主要な登場人物を紹介してきたが、今回は AWG-KP における典型的な議論のいくつかについて触れたい。